

2023年8月13日（日）主日朝礼拝説教

『死者はどこに行くのか』 井上隆晶牧師  
マルコによる福音書8章31～9章8節

### ①【死の準備をしない日本人】

今日は、永眠者記念礼拝です。人間は必ず死にます。それなのになかなか死に対して学ぶことも、死の準備もしようとしません。同居している84歳の母を見ていても、歳をとれば死の準備をするかといったらしません。どうして準備しないのか不思議でなりません。それは、死後の世界があるということを知らないのと、死後に神の前に立ちこの世で行ったことを裁かれるという事を知らないからなのだと思います。

### ②【私審判と公審判（最後の審判）】

ある金持ちがいました。紫の衣を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていました。紫色はとても高価で、皇帝とか身分の高い人しか着れない色でした。彼の家の前に、皮膚病を患う貧しいラザロという物乞いがいましたが、金持ちは彼を憐れむことも、施すこともしませんでした。ラザロは死ぬと天使によって、宴席にいるアブラハムのそばに連れていかれました。直訳では「アブラハムのふところ」です。昔の人は絨毯の上に寝ころび食事をしました。彼はアブラハムの宴会に主賓として招かれ、彼の近くに座ったという事です。それはパラダイスでの宴会を現わしています。金持ちも死んで「陰府」（ハデス）という場所に行きました。陰府とは死者の行く世界ですが「炎の中でもだえ苦しんでいます。」（24節）とあることから、苦しい場所だということが分かります。「地獄」は「ゲヘナ」（ルカ12：5）とって、最終的に滅びに定められた者が行く場所です。

●ここから正教会は審判というのは二つあると考えました。死んですぐに裁かれるのを「私審判」といい、世の終わりにキリストが再臨して、すべての生者と死者を裁くのを「公審判（最後の審判）」と呼びます。この最後の審判の後、新しい栄光の体を貰うこととなります。公審判までは仮の裁きを受けて、待機するのです。この世でも地方裁判所、高等裁判所、最高裁判所があつて、最高裁判所の判決が最終決定になります。一審、二審の判決が最高裁でひっくり帰ることもあるのです。カトリック教会はこの待機する場所の事を「煉獄」と名づけ、煉獄にいる間にこの世での罪を浄化するのだと考えました。正教会では「私審判」「公審判」だけにとどめ、煉獄思想は受け入れませんでした。

### ③【豊かにされたのは隣人と分け合うため】

金持ちとラザロの運命を分けたものは何でしょうか？キリスト教のあるグループは「信じる者は天国、信じない者は地獄に行く」といいますが、物事はそんなに

単純ではありません。信仰があるかどうかはここでは問題にされていません。ここでの基準は隣人に対する「愛と憐れみの行為」です。金持ちは、アブラハムに「ラザロを遣わし、水で舌を冷やしてほしい」と頼みますが、アブラハムはこういいいます。「子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもたえ苦しむのだ。」(25 節)

金持ちの罪とは何でしょう。金持ちであること、豊かになることは罪ではありません。しかし貧しい隣人が家の前にいたのに、与えられた富を分けようとせず、自分を喜ばすためだけに使ったことは罪なのです。「いや、自分の才能と努力で豊かな財産を得たのだから、自分の物を楽しむのは当然だ」と主張する人がいるでしょう。しかしあなたにその才能と富を与えたのは神なのです。富は人間のものではなく、神からの預かり物です。だから死後には持って行けません。恵まれた者、多くを預かった者には責任があるのです。貧しい人と分け合いっこするように神は与えたのです。この世の生き方にはちゃんとルールがあるのです。

●昨年 6 月にパキスタンは大洪水に見舞われ、多くの畑や家が流され、その後疫病が流行りました。畑や家を失った人たちは生活が苦しく、子どもは 12 歳で結婚させられるそうです。食いぶちを減らすためです。もし私たちがパキスタンに生まれていたらどうでしょう。一方はあり余り、一方は何も食べるものがありません。同じ人間なのにまことに不公平です。

私たちは TV で悲惨な人たちを見て可哀想にと思っても、自ら進んで施しをすることもせず、すぐに忘れてしまいます。そうやって一生が終わるのです。だから神様は、私たちの周りに貧しい人や、困った人を置いて、私たちが多少の善いことをするチャンスを与えておられるのです。歳をとれば尚更、弱い人や苦しんでいる人を憐れみ、「援助」や「募金」をしようではありませんか。

#### ④【この世の生き方が来世を決定する】

アブラハムは金持ちに「わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこから私たちの方に越えて来ることもしかない。」(26 節) と言いました。つまり、向こうの世界では変更がきかないということです。この世をどう過ごすのか、どのように生きるのかで、来世が決まるということなのです。そこで金持ちは、こんな苦しい所に兄弟たちが来ないように、死んだラザロを蘇らせて家族の所に遣わしてほしいと願うと、アブラハムは「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼等に耳を傾けるがよい。もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。」(29 節) と言いました。「モーセと預言者」とは、聖書のことです。聖書にすべて必要なことは書いてある、それを信じない者はいくら奇跡を体験しても信じないだろうということです。それでは、死んだ人たちについてはもう何も出来ないのかと言うとそうではありません。

ません。天にいる者が助ける事はできませんが、地上に生きている者たちが祈る事はできると教父たちは言っています。聖書は「すべての人のために祈れ」と命じ、この全ての人の中に死者も入るといっているのです。キリストの血以外に人の罪を清めるものはありません。生者であろうと死者であろうと、悪人であろうと善人であろうと同じです。古代の典礼はどれも聖餐式の中で死者を記憶し、聖杯の中に記憶したパン屑を入れてキリストの血と一体にし、執り成しの祈りをしました。人類は一つの身体であり連帯して生きています。私たちが今日まで生きてこれたのは、多くのキリスト教徒以外の人の愛と犠牲があったからです。それらの人たちの為に祈ることは信仰をもらったクリスチャンの義務であり、お返しなのです。すべての人の救いのために祈ることは神の御心だからです。

●先日、ローマの信徒の手紙の中に、律法とは自分の中の「罪が正体を現すために」(7:13) 人間に与えられたものだと言われていました。罪は隠れているのです。榎本保郎牧師は本の中で「今日の時代に、私たちクリスチャンに最も欠けているのは認罪だと思う。自分がどんなに罪深い者であるかを知らないことである。これは今日に始まったことではないが、今日は特にそのことがひどいと思う。だからイエスが十字架について下さらなくても、救われなくても構わないというような思いになってしまう。」と書いていました。1980年に書かれたものです。43年前の人でも罪が分からなければ、今の人はずっとでしょう。私の教団では「罪」という言葉を使わなくなりました。

私は自分が幸せだと思うのは、自分の罪が露わになってしまった人たちと出会ったことだと思います。受刑者は特にそうです。言い訳できません。正体が明らかになった罪と向き合い、戦うしかないのです。また精神障害を患う人もそうです。生きずらさによって多くの罪や失敗を犯します。その本人を傷つきながらも愛し、受け入れようとする多くの家族や友人も見してきました。罪の正体が現れた人たちは、罪と向き合い、神に頼るしかないのです。だから神の栄光が現れるのです。闇がある所に光はあり、罪が現れたところには、神の恵みも現れるのです。しかし言い訳をし、開き直り、罪と向き合おうとしない人や家族もいます。そこには神の栄光も現れません。罪と向き合い、戦った人は、何か一皮むけたような悟りと輝きを持っています。この世の生き方が、来世を決めるのです。しっかりと自分の罪に向き合い、キリストに祈り、死への準備をしたいと思います。